

召命に関する司牧における福者アルベリオーネの生涯と思想

シスター マリア・ルイザ・ペヴィアーニ

皆さんとともに、私たちの創立者アルベリオーネの人間的、靈的、司祭的、カリスマ的、そして創立者としての全生涯にわたる召命への情熱についての私の研究と考察を共有できることを大変うれしく思います。

彼は、無数の男女の会員に対する非常に深い靈的な父親としての役割へと発展した情熱を持っていました。もし私たちが彼の心にある司牧的な次元、すなわち根本的で本質的な司牧性を見出すならば、それは彼が『世界の切実な必要』であり、『教会における根本的な仕事』と考えた召命に対する彼の思想と深く結びついていることがわかります。

アルベリオーネ神父による召命の神学

アルベリオーネ神父の神学は、第二バチカン公会議を先取りする非常に革新的な着想に満ちています。彼の召命へのアプローチは当時の一般的な考えに沿いながらも、深い召命の神学に基づいていました。彼はこう述べています。「召命とは、教会の益のために、父と子と聖霊が魂の中で行われる業である。これは単なる呼びかけではなく、天に至るキリスト・イエスへの私たちの応答と私たちの一体化を意味する。召命は12歳、15歳、20歳で始まるものではなく、神の心に永遠から存在するものである。それは、父と子と聖霊が、教会と全人類の救済のために魂を選ぶという特別な愛の行為であり、三位が同意したことなのである。」

召命の分野における預言者

私たち使徒の女王修道会にとって、アルベリオーネ神父を「召命の分野における預言者」として認識することは自然なことです。彼の教えを通じて、私たちは召命のためのカリスマを託されました。彼は修道会の創立時にこう言っています。「確かに問題はあります。私が知る限りでは、より多くの学究が必要です。重要な仕事に違いありませんが、神に召された人々の人生の方向づけほど、教会と人類への大きな貢献はありません。」

神から呼ばれた一人ひとりがその人生において神の呼びかけに応えるための識別と養成が重要であり、それを見出す旅は素晴らしいものだと思えます。それは、個人的な識別の過

程において、光と影の瞬間を経験するものです。彼自身も司祭職、修道生活、創立者としての召命において、常に同伴者を得ていました。たとえば、フランチェスコ・キエーザ神父との深い霊的關係がその一例です。

召命への配慮：創立者の生活における一貫性

創立前のテキストや、卓越したカリスマ的テキスト『Abundantes divitiae gratiae suae(神の豊かな恵み)』の中のカリスマ的体験の回顧を読むと、アルベリオーネ神父の人生と彼が創立した修道会に共通する一貫性が繰り返し現れていることがわかります。彼の識別に重要な役割を果たした人物には、母テレサ・アロッコや教師ロサ・カルドナ、チェラスコのサン・マルティーノ教区、そして幼少期の教区司祭ジョヴァンニ・バッティスタ・モンテリーノ神父がいます。

また、彼はフランチェスコ・キエーザ助祭のもとで霊的指導を受け、神の御心を識別し、自分と他者に対する識別力を磨きました。この深い霊的指導は、彼の司祭召命と修道召命における識別において重要な支えとなりました。

アルベリオーネ神父の召命に対する強い感受性は、その生涯を通じて教会における召命の司牧に奉仕する修道会においてますます具現化されていきました。この感受性は創立以前からすでに著作で強調されており、『神を愛するために私は創られた』という『青年日記』の中で、少年時代のアルベリオーネは自己認識の深い取り組みを示し、召命に従うことが自身の人生にとって不可欠であることを訴えています。

召命識別のための指針と支援

彼のノートブックには召命の識別に関する指示や、「それについて考え、祈り、助言を受けなさい」といった助言が含まれています。彼は、召命の守護者、特に司祭召命の守護者として聖母マリアへの信仰を持ち、召命の識別において聖母が模範であると述べています。

司祭召命の守護者

若い司祭であったアルベリオーネ神父の個人的な歴史と最初の任務からも、彼の上司や養成者が彼の中に深い召命の感受性を見ていたことがわかります。

1912年に書かれた最初の文章『司牧神学ノート』には、アルバ教区の若い司祭たちに向けた助言や司牧経験が詰まっています。彼はここで「召命の識別が重要である」と述べ、「本当に

召命なのかどうかをよく検討し、もし肯定的であれば奨励し、否定的であれば思いとどまらせるべきだ」としています。この識別の必要性は、アルベリオーネ神父の司牧と修道会設立における重要なテーマとなっています。

召命識別の能力

アルベリオーネ神父は「召命を見極める能力」として、臨床的かつ霊的な識別力を挙げ、召命に自覚的であることの重要性を強調しました。

また『司牧神学ノート』の中で、召命分野で活動する者に対し、神の計画を信頼し、寛大かつ自由な態度を持つよう求めています。「神は教会にとって必要な司祭や修道者の数をよくご存じです。私たちは召命に応える者を見出し、あらゆる方法で支援する義務があります」と述べています。

召命の福音宣教

召命の司牧は単に識別と方向づけにとどまらず、召命に関するカテケージス、すなわち召命の福音宣教にも及びます。これは関わる人々に全人的な探求を促すものであり、「司祭の熱誠に参与する女性」にも、神からの唯一無二の召命が与えられ、教会の使命に協力することが求められています。

召命への具体的な取り組み

アルベリオーネ神父の豊かなインスピレーションは、修道会の設立を含め、召命を助けるためのさまざまな活動に結実しました。

例えば、彼は教皇庁の活動として宗教的召命に関する修道院長委員会の会長を務め、また「すべての召命のための祈りと犠牲の信心会」を設立し、召命支援を推進しました。また、ローマのレジーナ・アポストリ聖堂は「すべての召命のためのマリアのセンター」として彼が構想したものであり、今年その献堂 70 周年を祝います。この場所は、すべての召命の守護と支援を象徴しています。

パウロ的霊性と召命の司牧

教会における召命の司牧活動に関し、アルベリオーネ神父は、聖パウロに倣い「召命の福音」を伝える重要性を説いています。彼は聖パウロを召命の模範とし、ロザリオを「召命のためにあり、召命を求め、育み、応えるためにあるもの」として祈りました。

召命識別の方法論的指針

アルベリオーネ神父は、長い経験をもとに、霊的指導者および召命の同伴者として「祈り、熟考、助言」という 3 つの手段を提案しました。最後には「よく考えなさい」と述べ、慎重かつ深い識別を重視しています。

- a) 祈り: 神の光が魂に浸透するように。
- b) よく考えること: 召命の選択とそれに続く応答は人生における重大な決断であり、地上での平穏と永遠の幸福はこの選択にかかっている。
- c) 助言を求めること: 知恵があり、愛に満ち、真の善を求める人とともに識別すること。

これらの手段で十分に準備した後、アルベリオーネ神父は最終的な段階に「よく考えなさい」と付け加え、慎重な熟考が現代の識別においても重要であると強調しました。

召命のための奉獻の祈り

アルベリオーネ神父は、パウロ家族全体に「主の祈り」を捧げ、召命の司牧と宣教のために祈り続けるよう呼びかけました。この祈りを「いのちの神」に捧げ、すべての召命のために祈ることを通じて、召命の美しさ与人々への奉仕に向けた献身の重要性を強調しています。

この祈りは 1923 年に作られ、パウロ家族の共同体で毎日唱えられてきました。「イエスのように魂を渴望する人々のために」というタイトルで呼ばれ、祈りの中に神に対する全き献身の精神が込められています。その後、祈りの内容が修正されましたが、献身と司牧宣教の具体的な領域で祈りを捧げることは今も変わりません。

1957 年 8 月 15 日、アルベリオーネ神父はこの祈りを最初のパウロ会修道女たちに託し、次のように述べました。「この祈りには、求めるべきすべての恵みが少しずつ含まれています。召命の自覚があるのです。」この献身の祈りは、召命の使命において自己を完全に捧げる方向性を示し、アルベリオーネ神父からパウロ会に受け継がれたカリスマ的遺産を体現しています。

祈りと献身の意味

この祈りの中で、私たちは神の恵みに感謝し、イエスを通して父なる神に「若者たちとすべての人々を神の国へ導くためのパン」を求めます。人々が自らの道を見出し、神聖さに向かって進むために必要な導きを願うのです。そして、「世の光であり、世の塩である人々を求める」ことを切に祈ります(マタイによる福音書 5 章 13-16 節参照)。

召命の使命は、イエスと交わり、祈りといのちの贈り物と償いの次元を持つものであり、神の民のために捧げられています。これによって、召命の種が育まれ、神の家族すべてがその実りを受け取ることができるようにします。祈りにおいて私たちは、神が私たちに召命し、人々に奉仕する計画を実現することを願い、「神が私たちに招き、派遣される」神の計画の一端に参画するのです。

召命奉獻の祈りの背景

召命奉獻の祈りは、神の恵みによって召されたすべての召命のための記念であり、パウロ家族全体が召命宣教に身を捧げる使命の美しさと献身を示すものです。アルベリオーネ神父がこの祈りを家族に託したのは、単なる形式的な儀式ではなく、人生全体を捧げる実践的な「典礼」として意図していました。

祈りにおいて「すべての召命」とその旅全体が包含されています。召命の種が芽吹き、花開き、やがてそれぞれの使命を果たしていくようにと願い、祈りを捧げるのです。また、家族や学校、教会共同体といったすべての関わる者がその召命において共に責任を持ち、協力することを願っています。

祈ることは、すでに人々の霊的な必要と召命の美しさを認識する行為でもあります。祈りによって私たちは神の計画に参加し、神の救いの働きに共に参画することができるのです。

召命の実践:証しと奉仕

私たちにとって召命は、イエスに倣うことであり、人々に奉仕するために全生涯を捧げることを意味します。アルベリオーネ神父が示した道に沿って、私たちは祈り、熟考し、神にすべてを捧げる心を持ち続けなければなりません。

彼はこう教えています。「もし私たちが隣人を自分自身のように心から愛するなら、私たちは自分が持つ大きな善、すなわち召命を他の人々にも望むでしょう。もし私たちが召命の恵みに

満足しているなら、他の人々にもこの理想を共有したいと思うのです。召命への応答を通じて、私たちは神の計画に参加し、人々に神の愛を伝えるのです。」

共同体としての召命の証し

アルベリオーネ神父は、家庭や小教区共同体における兄弟的生活の証しの重要性を強調しました。彼はこう述べています。「もし信仰の共同体が、家族的な雰囲気の中で生活し、支え合う場を提供するなら、その影響を受ける人々も自然に召命の道に従うでしょう。」彼にとってこの「磁石」のような引力は、祈りと証しによって人々を神の愛に引き寄せる力であり、修道生活をよく生きる魂は召命を引き寄せる磁石のような存在であると考えていました。

召命は、個人の応答だけでなく、共同体全体の証しが大切です。修道生活における深い祈りと証しが、神に呼ばれた新たな魂を引き寄せ、霊的な家族の成長に貢献するのです。

霊的な同伴と識別の重要性

アルベリオーネ神父は、賢明で忍耐強く、献身的な霊的同伴が召命識別の中で不可欠であると考えていました。彼は「家族」のように一致し、協力し合うことが聖霊の働きの基盤であると述べました。私たち一人ひとりが自分の利害を越えて奉仕し、他者の召命の成長を支援するよう招かれているのです。

最後に

アルベリオーネ神父が使徒職姉妹たちやパウロ家族全体に与えた最後のアドバイスはこうです。「召命のために生きなさい！そう、召命のために生きなさい。イエスがそうされたように召命を知り、育み、神に祈り続けなさい。すべての努力を神に捧げ、困難があっても信仰をもって行動し続けるのです。」

アツリッチャ、2024年10月24日